

【研究ノート】

## わが国における北米ウィルダネス研究の先覚者・東良三

Ryozo Azuma, A Forerunner on American Wilderness Study in Japan

関 智子

青森大学総合経営学部

### Abstract

The purpose of this research is to explore environmental thought formed from ideas on the American wilderness. Furthermore, key Japanese personnel were surveyed in order to compare the roots of environmental thought in the United States and Japan. As a result, it was found that enthusiastic mountaineer, explorer and researcher Azuma Ryozo came into close contact with the wilderness in the United States in the early 20th century and conducted amounts of bibliographic research. The works conducted by Azuma and his ideas will provide helpful insight in future US-Japan comparisons of environmental thought research.

**Keywords** : Ryozo Azuma, wilderness, environmental thought, the United States

#### 1.1 はじめに

地球温暖化に象徴される重大な環境破壊に対応するために、我々は現在、人類の英知を総動員する必要がある、過去から現在までの様々な知恵、自然との共生のあり方などを再度作り直し、改めて人類のありようを考察する必要に迫られている（加藤, 2019）。環境思想研究はその一翼を担うものである。

本稿は、2018年度から2020年度の青森大学教育研究プロジェクトにて採択された「ウィルダネスによって形成されたアメリ

カ環境思想の基礎的研究」の展望小論文である。筆者は日本における環境思想のルーツにかかる研究をきっかけに、諸外国との比較を通して日本の特性を明らかにすべく一連の研究を行ってきた。その中でアメリカ人と原生自然（wilderness ウィルダネス）の関わりについての諸研究に出会い、環境思想の日米比較に着手している。

以後、アメリカにおけるウィルダネスとヨーロッパからの移住者の葛藤についてその歴史を探求してきたが、20世紀初めに一人の日本人がアメリカのウィルダネスに深

く接触し、さらに膨大な文献調査を行っていることを知った。この人物が東(あずま)良三(1889-1980)である。しかしながら、東を対象とした研究事例は見当たらない。

東はヨーロッパからの移住者とは異なる感性でアメリカのウィルダネスに溶け込んでいき、それらの人々のウィルダネス観とは異なる反応を示している。筆者はウィルダネスと人間との関係について、ヨーロッパからの移住者と日本人による考え方の違いに着目し、2020年度は東に焦点を絞り調査を行った。今後はさらに研究を進め、アメリカのウィルダネスが近代人に与えた影響について日米間の比較を行い、新たな見解を示したい。

東は、日本語による著作を少なくとも17点残している。その他、雑誌や新聞への寄稿や日記などがあるが、そのほとんどは散逸したままで、入手困難である。本稿では、そのうち主要著作の中から5点を選び、東の思想、行動、アメリカに対する視点などの手掛かりから、彼のウィルダネス研究の水準について考察する。特に、北米ウィルダネスに関する利用と保護の考え方、自然美の受け取り方、先住民族への見方などについて、ヨーロッパからの移住者とは異なる視点に注目する。

## 1.2 ウィルダネス(wilderness)の定義と訳語

本研究のキーワードであるウィルダネスは多義性をもち、日本においては誤解が生じやすい言葉であるため、その定義を確認し訳語の選定について説明する。

ウィルダネスは、アメリカの国家原生自然保全制度法(National Wilderness

Preservation System Act)において「人間によって改変されていない地域であり、人間自身が居住者ではなく訪問者である地域」(筆者訳)と定義されている。さらにNash(1967)は、文明がウィルダネスを創造したことを前提に「自然を自らの意志(will)をもつ部分と、人間の意志に従うよう屈服させられた部分とに分けて考えることが意味をなすようになった。wildernessは自己意識をもった土地(self-willed land)を意味している」と、ヨーロッパからの移住者によって構築された精神的意味をも付け加え、現代的なウィルダネスの概念をまとめている。

一方、ウィルダネスの日本語訳としては、古くから「荒野」「原野」などが充てられてきたが、近年、「原生自然」と訳される例が多いことが指摘されている。しかし、「荒ぶる自然」「荒地」「手つかずの自然」などの訳語もあり、日本語としての「原生自然」の定義に混乱が生じている。

この混乱の背景には、環境省が1975年、屋久島の一部と南硫黄島を「原生自然環境保全地域」に指定したほか全国5か所を同地域に指定しており、「原生自然環境」の定義は「人の活動の影響を受けることなく原生の状態を維持している地域(1,000ha以上、島嶼は300ha以上)」としていることが関係している。このことにより、環境省が示す「原生自然」とウィルダネスの訳語である「原生自然」が混同され、両者の定義が曖昧になってしまった。実際に、ここで示す日本の原生自然は極めて小さな区域を指すものであり、アメリカのウィルダネスほど広大ではなく、両者はその意味で異なっている。そのため双方を同じ「原生自然」という言葉

で表現すると、現実の事情が混同されて誤解を生じるのである。

このような状況の中で、アメリカ環境文学を研究している文学・環境学会は、わが国においてウィルダネスは「荒野」「原生自然」と訳されることが多い現状を踏まえた上で、環境文学およびエコクリティシズムの批評的文脈において、ウィルダネスとは、Nashのいう物理的意味に加え、精神的意味をも包含したものであることに賛同している。

以上から総合的に判断し、本稿では日米の原生自然における違いを認識しつつ、文学・環境学会の考え方に則り、ウィルダネスの訳語として「原生自然」を採用することにした。

## 2. 東良三について

東は、現在の和歌山県紀の川市粉河(当時は粉河村)に生まれた。北米を舞台に登山家・探検家、北米ウィルダネス研究者として活躍し、特にアメリカでその名を残しているが、わが国で知る人はほとんどいない。

東は1909年、20歳で単身アメリカ・ワシントン州に渡り、排日運動が激しい時代に大学(Puget Sound Collage)に学びながら、アメリカの雄大な自然に魅せられ、登山・探検に目覚めていった。

東の出身地、紀の川市粉河は、北に和泉山脈、南に紀伊山脈が走り、紀の川が静かに流れ、みかん畑が広がる町である。ここに生まれた少年時代、彼は山野を駆けめぐる活発な子どもだったようである。その一方で若い頃から徳富蘆花(1863-1957)の作品に傾倒し、その燃えるようなクリスチャンとしての宗教心と行動力に深く啓発された。東の父は仏教徒、母はクリスチャンという家

庭で育ったが、成長するにつれて父親に反抗心を持つようになり、さらに母の導きによって米国のミッションスクールへの留学が勧められ、渡米を決断する。

1909年7月、東はワシントン州シアトルに上陸する。ちょうどその時、シアトルでは国際博覧会が開かれており、会場を訪れた東は、はるか南に聳えるレーニア山(4,392m)の姿を見て感動したのであった。その翌年、シアトル市の日系新聞『北米時事』のタコマ支社主任として大学に通いながら就職した東は、さっそく地元山岳会に連れられてレーニア山に登頂した。そして、この時の登山で「アメリカの自然保護の父」と謳われるジョン・ムーアの存在を知るのである。1914年にはムーアとの面会を果たしており、それを機にアラスカ探検という新たな方向性を拓ききっかけを得て、1915年10月から2年7か月をかけ、アラスカ探検を実行した。

その後、シアトルに帰り、貿易会社の経営者となり、後にシカゴで柑橘類の貿易に携わり活躍した。在米25年、忙しい最中であっても東は熱狂的に山を登り続け、やがてアメリカでは知られた登山家となっていった。

1934年、帰国。それから戦後にかけて、彼は在米体験を基に精力的な執筆活動を続け、アメリカあるいはアメリカ人について国民に示していった。また山階鳥類研究所理事、日本鳥類保護連盟理事、国立公園協会理事、自然保護協会理事などを通じて日本の自然保護運動や諸活動を精力的に支援し、環境庁からも表彰を受けている。著作においては個人の考えを記さず、客観的視点を貫くことが多い東だが、『アメリカ国立公園

考』(東, 1948年)では彼の思想の一部を表明しており, 彼がどのような価値観で自然保護運動に関わっていたのか垣間見ることができる. 例えば「原始的な山紫水明の地を出来る限り自然のままに, 現在以上毀損することの無いように愛護して, 人類永遠の憩ひの場所として保存するために, 国家が一定の制度をしいて其の啓發に努めるといふのが, 国立公園の概念」(p19)と原生自然をそのままの状態に保存する価値を推奨し, 人間にとっての宿命とも解釈できる自然保護の重要性を訴え, 国民を啓發した.

このような東について, 現在わが国において彼を詳しく知る者はほとんどいない. 一方, アメリカでは「日本のジョン・キームス」(Kimes & Kimes, 1979)として評価され, 晩年の彼はアメリカ有数の自然保護団体シエラ・クラブから永年会員の表彰を受けた. 個人情報を含む東の資料は国内で発掘することは極めて難しいが, アメリカにおいては国立公園局やシエラ・クラブなどによって, その一部が保存されている.

### 3. 東良三のウィルダネス研究

東の北米ウィルダネスおよび北米に関する日本語の著作は, 1944年から1973年の間に少なくとも17点発刊されているが, 本稿では, アメリカ環境思想を紐解く有力な史料となる5点『アメリカ大陸の探検時代上』『アメリカ大陸の探検時代下』『アメリカ冒険物語 荒野の先駆者』『アメリカ国立公園考』『アメリカの山旅』を取りあげ, 東のウィルダネス研究の特性について考察する.

東の著作は一般人向けの啓蒙書として書かれており, 研究書としての体裁は整って

いないが, 実に多くの文献を引用している. 『アメリカ大陸の探検時代』では101の英文文献から引用しており, かつすべての著作を咀嚼していることがわかる. 仮に東が研究者であって, 著作内容を研究論文として出版していれば, わが国において北米ウィルダネス研究の嚆矢と位置付けられていたと思われる.

さらに彼は在米期間中, 熱狂的に北米大陸のウィルダネスを跋渉し, 身をもってウィルダネスを理解し感じ取っている. 旺盛な読書量と相まって, 日本人としては今に至るまで, ウィルダネス研究者として抜きん出た存在であるといえよう.

#### 3.1 アメリカ大陸開拓史・探検に関する著作

東は帰国後, 日本軍からの要請で, アメリカ開拓史・探検記を残した. まず『アメリカ大陸の探検時代 上・下』(東, 1947, 1948)は, 今日では広く知られるアメリカのフロンティア・スピリットやパイオニア・スピリットのルーツを掘り下げた書である. 北米各地の開拓史・探検記の詳細が綴られており, キャプテン・クック, キャプテン・バンクーバー, ルイス・クラーク探検隊などの勇敢かつ艱難辛苦絶えないエピソードが紹介されている.

東はこの著作において, アメリカ人とは白人だけではない, という姿勢を示しており, 土地に関係するあらゆる人々を包括するものと指摘している. 『四十八州アメリカ風土記』における「著者の言葉」では, 「筆者は在米二十餘年, 深く北米大陸の山岳を愛し, 河川美に傾倒し, インディアン, 黒人, エスキモー族の生活に心を馳せ, 国立公園,

森林, 氷河, 北極光の探求に没頭して, その足跡は, 全四十八州はおろか, 遠くアラスカ, ハワイにまで及んだこと一再にとどまらない」(東, 1950) と明言している。

『アメリカ大陸の探検時代 上』では, 先住民族であるネイティブ・アメリカンについての記述も多く, 自然との豊かな交流とともに未開性ゆえの残虐な部分もとらえている。インディアン研究家ベールル (A.Hyatt Verrill) の研究を紹介し, 先住民の役割について次のように記している。

インディアン研究家ベールル氏は, その著『北米南米及び中米のインディアン』の中に, (中略) 即ちわれ等はインディアンから何を興へられ, そして如何にしてそれに酬いたか, といふ一項を掲げて次のやうに叙述して居る。

(中略) アメリカ建國史にインディアンがどれだけ重要な役割を演じたかといふことを十分に認識し, その驚くべき貢献と奉仕に向つて感謝の理解を持つ人がどれだけあるであらうか。われ等は空手空拳を以て殆んど總てのものをかれ等から獲得したもので, (中略) この國に闖入した初代移住者が握つた富も名譽も, いなその人々の生命そのものさへもインディアンに負うところのものであり…

東 (1947, p.11)

その一方, ヨーロッパ人の活躍についても余すところなく伝えようとした。未知の世界の探検がどれだけ困難で危険であるかについて自らの体験によって熟知している東は, 作品全体にわたり先人の偉業に対して心から尊敬の念を込めている。「キャプテ

ン・バンクーバーの太平洋岸探検航海」の章では秀峰レーニア山について, ヨーロッパからの移住者が地元で古くからある山名を簡単に変えてしまったことに異を唱えている。

海岸真近き上空に, 前のベーカー山よりも遙かに高く大きい白皚たるいま一つの山があたりの群山を見下して屹立する豪宕たる雄姿を認めて如何に驚いたことであらうか。ヴァンクーバーは, かれと親しきレーニア提督を偲んでマウント・レーニアと名附けた。レーニア山は(中略) 古來インディアンが「タ・コーマ」(註・神なる山の意) と呼んで神聖視して居た靈峰であることは, 今更紹介するまでも無いことだ。

東 (1947, p.203)

『アメリカ冒険物語 荒野の先駆者』は上記著作とは異なり, アメリカのヒーロー, 北氷洋を発見したサミュエル・ヘルン (Samuel Hearne, 1745-1792), 北米大陸横断および太平洋岸に到達したダニエル・ブーン (Daniel Boone, 1735-1820), アメリカ中西部探検に生涯を捧げたアレキサンダー・マッケンジー (Alexander Mackenzie, 1755-1820) を主人公に構成された開拓記である。

本書の序において, 日本山岳会を創設した小島烏水は東の人となり伝えていいる。小島は横浜正金銀行支店長として約 10 年の在米期間中, 登山仲間として東のよきパートナーであった。彼は「東君は, 米國山川の偉觀と, 先駆者の假令物質的としても, 猶且つ殉教的とも云ふべき, 建設事業に憧憬

すると共に、愛國者として一片歌々の志あり、肚裏、彼等外國の先人を傳ふることに因つて、我等の常弊なる空腹高心を、誠しむるためにあらざるなきを得ん哉。」と紹介した。

同書には、原生自然と人間の闘いだけでなく、探検家がネイティブ・アメリカンと交流し困難を突破しながら信頼関係を培っていく過程や、文化伝統が著しく異なることから困惑、探検メンバー間の仲間割れなど、生々しい人間模様が織りなす伝記が含まれる。一方で、次のように東特有の自然観を反映した描写も散見される。

平野に出ると一面にクローバーは萌えて土地は肥え、小川は滾々として豊かな水を湛えて、その流れには無数の魚類が泳いで居ました。またところどころに楡の森が現れて、その美しい森のあるところには七面鳥や鹿などの野生動物が夥しく見られ、大自然の恵みが限り無くそこに現示されて居るかのよう感じられました。コロンブスのようにまた飢に迫られて瀕死に喘いで居る折柄、救いの七面鳥を見出して泣崩れた清教徒の一團のように天を仰いで感謝の祈を捧げたことが幾度あつたことでしょうか。

東 (1948, p.205)

この場面の描写は明らかに東の思いを表現したものであろう。彼の筆の強みは、自らウィルダネスを跋渉し、深く接触していたことである。丹念な自然描写と人々の情感に対する想像力には、経験の蓄積から醸成された彼自身の環境思想の一端が感じられる。日本人としてアメリカのウィルダネスに身を浸し、日本的感性との間でどのよう

にアメリカを吸収していったのか、この作品に多くのヒントが残されている。

### 3.2 東の自然保護思想

東が登山に熱中しはじめた1910年頃は、アメリカ国立公園の隆盛期であり、1916年には国立公園法が制定され、内務省に国立公園局が設置された。その時期にウィルダネスを歩いていた東は、アメリカの新鮮な文化的息吹を肌で感じ、大いに啓発されたはずである。これらの集大成はやがて『アメリカ国立公園考』として、自らの思想を明示する東の希少な著作となった。北米ウィルダネスに深く傾倒した東の、日本の自然に対する思いを述べている下りを引用する。

私は思う一。自然を禮讚する美しい心持の無い人に、眞に平和を愛好する床しい情操の人があり得ない、と。

それにしても、わが日本は世界に稀な風景國であることが何という幸いなことでありましょうか。

武器をかなぐり捨て、爽やかな平和ニッポンを創建しようとして居る私達は、わが國の力であり資源でもあるところの美しい天興の自然景観が、今日以上、心なき人々の手によって汚されたり破壊されたりすることに無いようにどこまでも尊重し愛護して、私達子々孫々に至るまで永遠に其の恩寵と感化に浴することの出来るように、またそれに適当な規則や正しい設備を施して、世界中の人々の観光を招來することに努めねばなりませんまい。

東 (1948, p.22-23)

さらに北米ウィルダネスに対する彼の

眼差しは、先住民族であるネイティブ・アメリカンにも注がれ、ヨーロッパからの移住者の考え方とは異なる視点を提示している。

国立公園や国立景勝保存地に指定されて居るアメリカやカナダの風景地で、インディアンとの繋がりを持つて居ないところが一つだって無い筈で、必ずそこには其の地の風物にからまる(中略)不思議な物語や浪漫的な古譚が言ひ傳へられて(中略)往時を回顧し憧憬せしめねばやまぬ奥深い雰囲気添えて居るのです。

東(1948, p.32)

このころ、わが国のアメリカ研究において東の着眼したテーマに類似するものは極端に少なかったようである。同書において「わが国の學者の間にもアメリカ歴史の研究家が澤山ありましようし、またそれに関する書物も澤山世に出て居る筈であります、一番肝心なアメリカン・スピリットを反映するところの、開拓時代のことを詳しく紹介した著迷が、これまで日本の讀書界に現れんかつたことは遺憾極まり無いことでありました」(東(1948, p.34))と記しており、アメリカの真髓を日本国民が理解していない状況に警鐘を鳴らした。

### 3.3 登山記・探検記

東は、在米期間中、北米 140 以上の山を極め、当時の日本登山界にあつてトップクラスの登山を敢行している。例えば山崎(1969)によれば、1910年のレーニア山登頂は日本人としては 2 番目の登頂であり、この時点では日本人の最高到達地点であつた。しかし、当時の日本の登山界はアメリカ

の山岳には興味を持たず、東はそれほど評価されなかつた。

一方、東の豊富な登山の記録は、出版物としては僅かである。また没後、日記などが散逸してほとんどが不明である。その中で『アメリカの山旅』は、彼の登山・探検活動を知ることができる貴重な 1 冊として評価できる。自然描写や活動の困難さを伝える専門的な記録に加え、小島烏水や『日本風景論』の著者・志賀重昂との山行、「ロッキーの恩人」と伝わるエノス・ミルスやその地のネイティブ・アメリカンにまつわる話、山岳の地理情報など、豊富なトピックに支えられた読み応えのある作品となっている。その中から、ロッキー山脈登山にまつわるエピソードの印象的な部分を抜粋する。

『ロングス・ピーク・イン』はロッキー啓發のためにその生涯を捧げて、ロッキーに関する十数冊の著書を世に送り、かのシエラの哲人ジョン・ミューアと共に、米國が生んだナチュラリストの二大雙壁とたゞえられたエノス・ミルスが 1902 年に建設した山宿で、この眞摯朴直な自然人ミルスが 1922 年、まだ五十二歳の壮齡で歿した(中略)ミルス未亡人は山行の用意をして來なかつた私に一再の登山装束を貸與して呉れ、召使ひに命じて明日の辨當の用意をしてくれながら、山宿にふさはしい田舎びたファイアプレースを囲んで、夜おそくまでミルス先生のありし日の物語をしてくださる。自然と人間を暖かく結びつける山中には國境も無く人種の意識も無い。私がこゝにも純眞な山人の溫情を見出して、自然が人の心に興える感化の深く大なることをいまさらの

やうに有難く思ふのであった。

東 (1946, p.4-5)

東の精神世界に深く関与している登山・探検は、世界観を構築するための活動でもあった。特にこのエッセイは、ウィルダネスを通じたアメリカ人との良質な交流を含む登山記であるといえよう。

#### 4. 終わりに

本稿では、対象とした東良三の主著作品を通じて、彼の北米ウィルダネス研究の内容の水準と量を確認するとともに、東研究を起点とした日米におけるウィルダネス研究あるいは環境思想研究の見通しについて検討、考察することを目的とした。東の北米ウィルダネス研究は、夥しい量の文献研究とともに登山・探検活動を介した徹底的なフィールドワークに支えられているものであることが明らかになった。

それらの著作を分析した結果、彼は①20世紀初頭から中葉にかけてわが国第一のウィルダネス研究者である可能性が高い、②通説となっているヨーロッパ人の自然観とは異なり、自然を対象物とせず、自然の中に溶け込もうとする精神的傾向がある。これはアメリカを代表する自然愛好家であるジョン・ミューアが山岳美を称え「カセドラルのようだ。神からの贈り物」といった視点で人間と対峙する自然を描写するものとは異なり、日本的自然観に近いものと考え、③先住民の思想に感銘を受けている、④ヨーロッパからの移住者の活動に一定の理解を示し、冒険心や挑戦する気概に賛意を示している、⑤日本人排斥運動が盛んだった当時、多くの良質なアメリカ人の友人を得て

いるが、それはいずれも山や自然を通しての友好関係であり、自然の持つ力を示しているなどの特徴があり、ヨーロッパからの移住者とは見解を異にする部分が多く見受けられる可能性が明らかになった。

一方、東自身が著作で語っているように、わが国の北米ウィルダネス研究は20世紀初頭にはほとんどなされていなかった。その後も、大正デモクラシーを経て、戦後、急激に進化したアメリカ研究にあつて、岡田 (1994, p.7-8) が指摘しているように、ウィルダネスとアメリカ人の形成についての特殊な研究は極めて乏しい。アメリカ国内では古くから研究が進んでいるが、Turner (2010) の「ヨーロッパの精神とアメリカのウィルダネスがアメリカ人を作った」という説をベースとしたものが主流であり、「アメリカ人によるアメリカ人のためのウィルダネス研究」の域を出ていないようである。近年、国際的視点からウィルダネス研究を進めるべきだという見解も出ている (Lewis (2007, p.11-12)) が、これからの分野と言えるだろう。また、日本におけるアメリカのウィルダネス研究は、その紹介にとどまっている傾向にある。

アメリカのウィルダネスがどのように近代人に影響を与えてきたのか興味深い課題だが、現在のところアメリカ人、特にヨーロッパからの移住者の研究にとどまり、人類史的視点から人間とウィルダネスの関係を視野に入れた研究は行われていない。黒人や先住民さらには東洋人などもアメリカにおいてウィルダネスに接し、啓発されているわけであり、白人以外を対象とした研究もさらに進めるべきである。

東とウィルダネスの関係を考察すること

は、多様な人間とウィルダネスとの関係を明らかにする契機となる可能性が高い。その考察をさらに進め、古代からの様々な自然観の研究を総合する作業が始まれば、環境思想研究の重要な要素を構築できると思われる。

◆文献

- 加藤尚武 (2019). 『加藤尚武著作集 7 巻 環境倫理学』. 東京：未来社.
- Roderick Nash (2014). *Wilderness and the American mind*. Yale University Press; Fifth edition.
- William and Maymie Kimes (1979) Ryozo Azuma, the John Muir of Japan, *Sierra*, 64, 42-44.
- 東良三 (1947). 『アメリカ大陸の探検時代上』. 東京：目黒書店.
- 東良三 (1948). 『アメリカ大陸の探検時代下』. 東京：目黒書店.
- 東良三 (1950). 『四十八州 アメリカ風土記』. 東京：日本出版共同.
- 東良三 (1948). 『アメリカ冒険物語 荒野の先駆者』. 東京：淡路書房.
- 東良三 (1948). 『アメリカ国立公園考』. 東京：淡路書房.
- 東良三 (1946). 『アメリカの山旅』. 東京：山と溪谷社.
- 岡田泰男 (1994). 『フロンティアと開拓者 アメリカ西漸運動の研究』東京：東京大学出版会.
- F. J. Turner (2010) . *The Frontier in American History*. New York: Dover Publications Inc..
- M. L. Lewis (2007) . *American Wilderness : A New History*. USA: Oxford University Press.

---

## Ryozo Azuma, A Forerunner on American Wilderness Study in Japan

Tomoko SEKI

Faculty of Business Administrations, Aomori University

### 要 旨

本研究の目的は、アメリカのウィルダネスをめぐるアイデアから形成された環境思想を探求することである。さらに米国と日本の環境思想のルーツを比較するために、キーパーソンとなる日本人について調査を行った。その結果、20世紀初頭、熱狂的な登山家、探検家であり研究者である東良三がアメリカにおいてウィルダネスと深く接触し、膨大な文献研究を行っていたことが明らかになった。東の研究と彼の思想は、今後の環境思想研究の日米比較において有益な見識を提供すると考えられる。

キーワード：東良三、ウィルダネス、環境思想、アメリカ